

## I 研究主題

「確かな学力」を育てる国富の教育プラン

～学びの習得サイクルを重視した授業の構成と家庭との連携～

## II 主題設定の理由

少子高齢化や経済格差が進む極めて厳しい社会状況の今日、次の時代を背負う子どもたちには、これら乗り越える健康や体力はもちろん、「知」の側面である主体的に学び考え判断できる能力としての「確かな学力」を育成することが緊要である。

本町の最重要な教育的課題は学力の向上である。本町の子どもにこの確かな学力を身に付けさせるための課題として、次の2つがあげられる。

- 1 各学校において、学習指導要領の趣旨に沿った指導となるよう授業の工夫改善を図ること
- 2 家庭において、望ましい学習の仕方を身に付けさせること

授業の工夫改善については、昨年度までの協調学習の研究から、子どもの学習心理・認知過程を踏まえた学習理論の重要性を確認した。「確かな学力」を身に付けさせるには、思考力・判断力・表現力等の育成が重視される。知識を活用しなければならない説明や話し合い、また表現する等の言語活動はその意味で大切である。しかし、その活動は、基礎的基本的な知識・技能の確実なおさえが前提となる。子どもたちの学力差が少ない本町においては、まず配慮されなければならないことである。このような視点に立った「どの子どもにも理解できる」授業の構築、学習指導過程の見直しが必要である。

家庭学習の面において、十分とは言えない学習習慣の問題とともに考えられなければならないことは、学校の授業と家庭学習との関連の問題である。家庭学習は一部教科を除き、復習を中心とするという指導の実態がある。自ら学ぶという計画的・主体的な学習態度は、学年・学校段階が進むにつれて大きな意味をもってくる重要な学習態度であるが、そのような学習態度を育てるためには学校での指導が欠かせない。しかし、実態として授業と関連を図った家庭学習の指導、特に予習と関連を図った指導はあまり行われていない。学習機会の一つである予習には、あらかじめ学習内容を概観することで、授業を効果的に理解したり授業への構えをつくったりするという大きな意味もあるが、先に述べた主体的な学習態度の形成とも密接につながるものである。学校と家庭学習（予習や復習）との効果的な連携の輪（「学びの習得サイクル」と名付ける）の構築を検討する必要がある。

本研究センターではこれらをふまえ、今年度から東京大学市川教授の提唱する「教えて考えさせる授業」の考え方をもとに、子どもたち一人ひとりが真に分かり、教師の側からみてもこれならできるという授業、基礎的な知識・技能の確実な習得が図られる「習得型スタイルの授業」の確立を目指す研究に取り組む。また、予習を手掛かりとし、家庭学習の指導の在り方についても研究を行い、「学びの習得サイクル」の確立に向けた研究に取り組む。

授業研究に際しては、研究員全員が検証授業を行い、学校と共に課題解決にあたっていきたい。小学校算数と中学校国語を中心に研究を進める。また、授業と家庭学習との連携については、予習を手掛かりとした研究を行うが、次年度は復習をも含めた研究をしていくことになる。

本センターのこのような研究は、今日の教育の期待に応えるものであるとともに、国富町が目指す「心豊かで いきいきと輝く 人づくり」（第五次総合計画）に則った国富のこれからの教育の実現に大きく関わるものである。

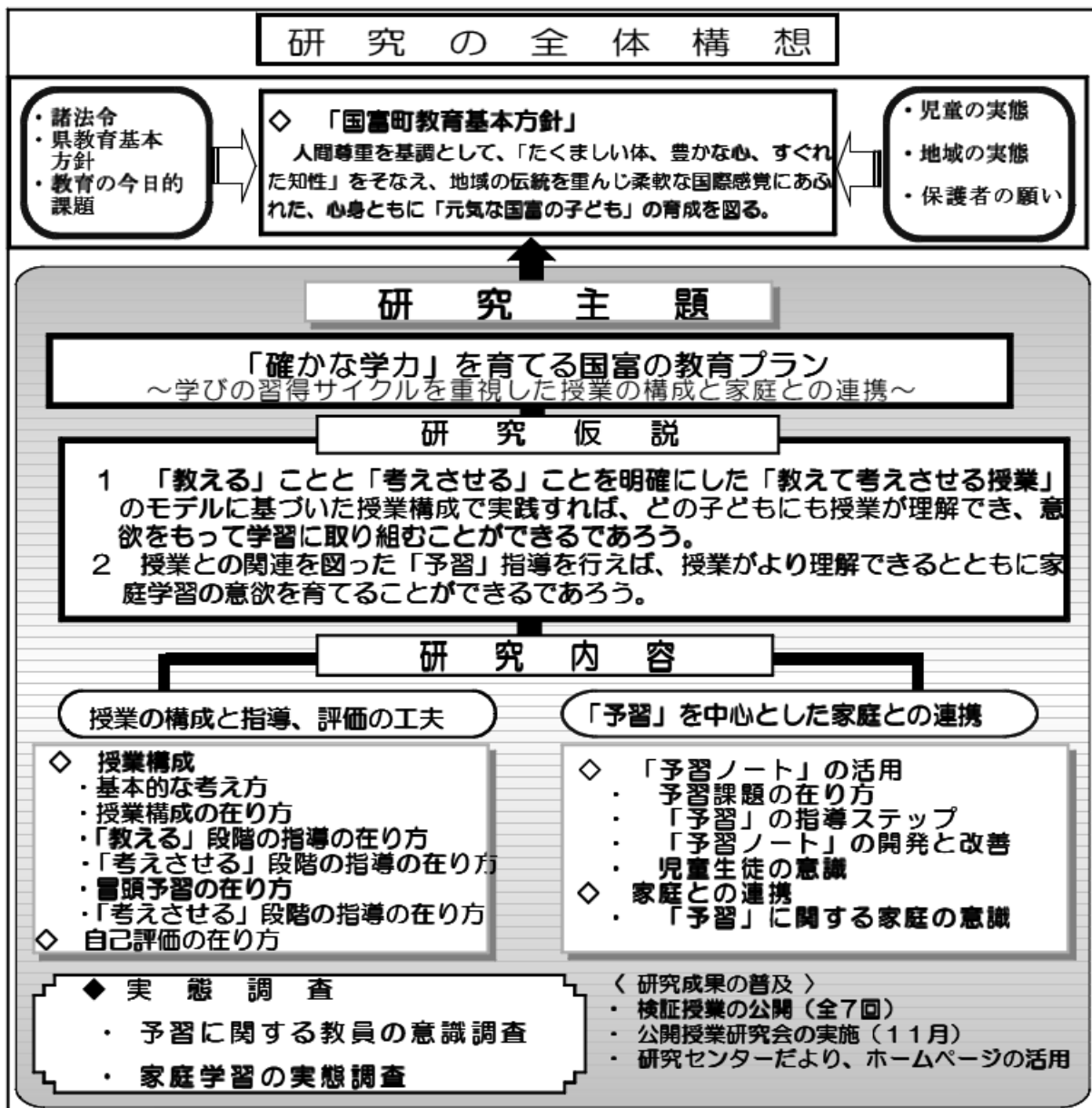
### III 研究のねらい

「教える」ことと「考えさせる」ことを明確にした習得型授業の構築、授業と家庭学習との関連を図った「学びの習得サイクル」の研究を通して、授業の工夫改善と家庭学習の在り方を追求し、子どもに「確かな学力」を身に付けさせる。

### IV 研究仮説

- 1 「教える」ことと「考えさせる」ことを明確にした「教えて考えさせる授業」のモデルに基づいた授業構成で実践すれば、どの子どもにも授業が理解でき、意欲をもって学習に取り組むことができるであろう。
- 2 授業との関連を図った「予習」指導を行えば、授業がより理解できるとともに家庭学習の意欲を育てることができるであろう。

### V 研究の構想



### VI 研究組織 略

## VII 研究の実際

### 1 研究の基本的な考え方

#### (1) 「教えて考えさせる授業」が目指すもの

学習指導要領への対応や学力の向上に向け、授業の工夫がさまざまに行われている。しかし、それらにはまだまだ課題が多い。例えば、「教える」ことを後回しにして自力解決から始める授業の場合、子どもによっては、どんな知識・技能をどう使えばよいか分からず時間が過ぎていく。逆に必要な知識・理解をもった子どもには、簡単に解決できてしまい退屈な授業となったりする。また、学習過程に話し合い活動や問題解決的な活動がしばしば組み込まれるが、必要な知識や技能が子どもに押さえられていない場合はその活動が上手く進まない。

さらに、学習の目的、内容への意識や学習で得られたものに対する自身への問い返しが無い場合は、子ども一人ひとりの概念の再構成や確かな知識の獲得に結びつきにくい。

「教えて考えさせる授業」は、東京大学の市川伸一教授が認知心理学の研究成果<sup>\*1</sup>を生かして提唱された知識・技能の確かな定着とそれらを活用する力を育てることをもねらう、習得を重視した「習得型授業」であり、先に挙げた課題に応えられる可能性をもつ授業である。

※1 市川伸一『学ぶ意欲とスキルを育てる』2004年の「認知心理学から見た学力と知識」参照。他に、「他人の考えを聞いたり、他人に説明したりする過程を繰り返すことにより、人が自分の「経験則」をとらえ直し、・・・抽象度の高い説明モデルを獲得し得る。」（『協調が生む学びの多様性』東京大学 大学発教育支援コンソーシアム推進機構平成22年度報告書）は、活用する力を育てる言語活動の意義を指摘する。本研究センターは、これらの理論をふまえて研究を進めた。

#### (2) 「教えて考えさせる授業」の構成

「教えて考えさせる授業」は、習得を重視する授業だが、同時に、「教えられた事」を活用する力の育成もねらう。

下に示す学習の流れのように、授業は教師の説明（「教える」段階）から入り、必ず子どもの理解状況を確認した後、知識・技能を活用する段階（「考えさせる」段階）に入る。この段階の最後では、自己評価によって学習後の変容を自ら確かめる。

活用と習得は繰り返され、知識・技能の確実な定着を図ろうとするものである。（図1）

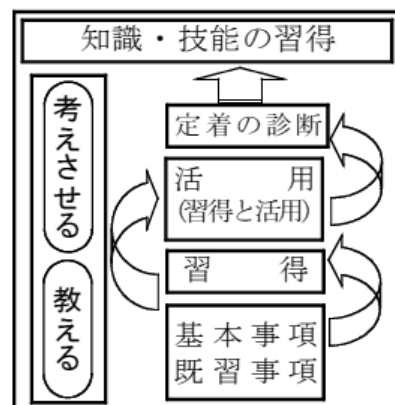


図1 【「教えて考えさせる授業」の構成】

【「教えて考えさせる授業」の学習指導過程】

指導過程		各段階の概要	
教える	知る	(冒頭予習)	○ 学習内容の概略と疑問点を明確にする。(実態に合わせて設定)
	教える	【ステップ1】	○ 知識や技能を確実に、わかりやすく教える。 ※ 対話や挙手・発言等を通して理解をチェックする。
考えさせる	確かめる	理解確認	○ 教師の説明や教科書の内容を確実に理解できているか確認する。 ※ 説明や教え合い活動、確認問題等で確認する。
	深める	理解深化	○ 理解させたことを活用し、誤解・誤答しそうな問題や発展的な問題に取り組みせる。 ※ 協同的学習等、学習形態を工夫する。
	振り返る	自己評価	○ わかったこと、わからないことを自己評価させる。(メタ認知)
		【ステップ4】	

### (3) 家庭での学習と関連を図る「学びの習得サイクル」

小学校学習指導要領解説<sup>※2</sup>には、授業において学習の見通しをもたせたり、家庭において学習の見通しを立てて学習をしたり、学習した内容を振り返ることの大切さが述べられている。授業が重要なことは言うまでもないが、授業時間だけで学習内容を定着させ、学力を効果的に高めることは難しい。最近の研究では、授業だけより、予習や復習を組み合わせることで学力向上に有効であることが示されている。<sup>※3</sup>

本研究では、授業だけではなく授業と関連付けられた家庭での復習や予習も学習内容の習得機会であると考え。とりわけ授業前に学習内容に出会う「予習」は、学習を見通したり、学習への構えを育てたりする点で大きな効果が期待される。

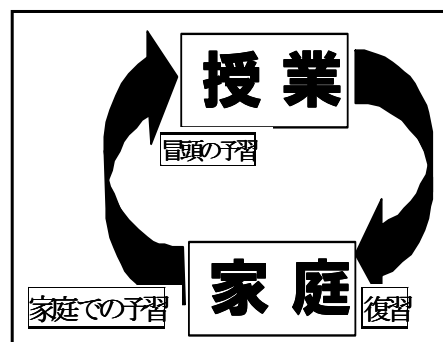


図2 【学びの習得サイクル】

授業、および授業と関連付けた家庭学習（予習・復習）を結びつける輪を、本研究センターでは「学びの習得サイクル」と名付け、このサイクルの確立を目指す。（図2）

#### 「学びの習得サイクル」のねらい

- 1 家庭での予習や復習をすることで学習の機会を増やし、授業理解を確かなものにする（予習・復習）
- 2 授業に向け、主体的に学習をしようとする姿勢を育てる。（予習）

※2 小学校学習指導要領解説 総則編 第3章第5節2 参照

※3 ベネッセ教育開発センター「授業と家庭学習のリンクが子どもの学力を伸ばす」（学力向上のための基本調査2008） 第2章3 参照

### (4) 研究の方向性

以上のことを踏まえ本研究センターでは、第1に、市川教授が提唱する「教えて考えさせる授業」=習得型授業の実践上の課題を小学校算数科および国語科で研究する。第2に、「学びの習得サイクル」の確立を目指した家庭学習の指導の在り方、特に「予習」を手掛かりとした研究を行う。

## 2 授業実践による検証～「教えて考えさせる授業」=習得型授業 の構築とその課題

「教えて考えさせる授業」の基本的な理論研究をもとに小中学校で7回の授業を行い、授業構成の在り方や各段階の指導の工夫について検証した。

### (1) 「教える」段階での指導の工夫

#### ア 授業冒頭の「予習」

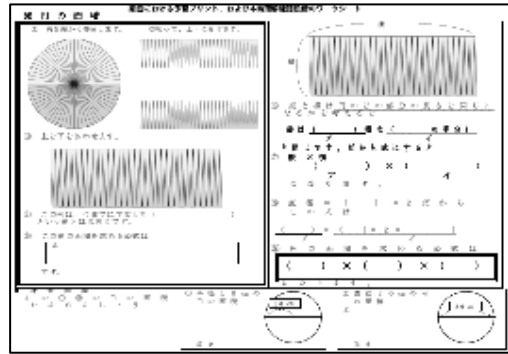
学習内容の見通しと授業への構えを付けさせるねらいをもって授業の開始直後に1分間の予習時間を設定した。教科書を見て本時の学習内容を見通させたり、家庭で行ってきた予習プリントの確認をさせたりする等の時間にあてた。

教科書を使った予習では、「読む」「わからないところに印や付せんをつける」など、簡単にできることをさせた。子ども達はスムーズに取り組み、継続していくうちに、教科書を見るだ

けでなく書き込みや付せんをつけるなど一歩進んだ予習の姿が見られるようになった。



【授業冒頭の予習 小学校5年】



【6年算数「円の面積」予習プリント】

授業冒頭予習に対する子どもたちの意識調査の結果を以下に示す。「予習」によって授業が分かりやすくなったと答える子どもが多く、その有効性がうかがえる。

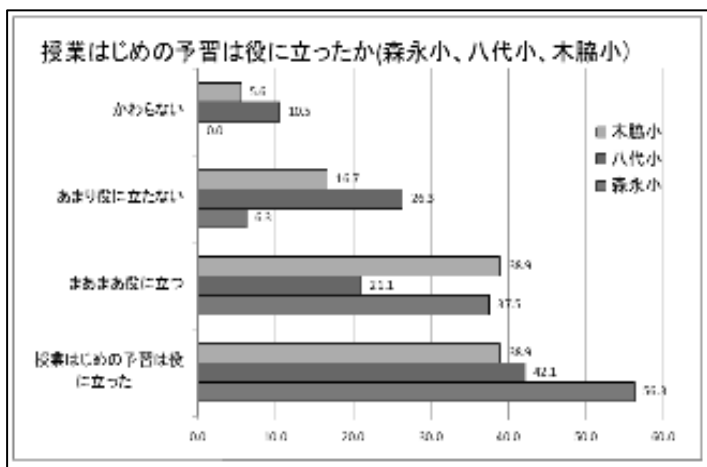


図3 【冒頭予習の効果に対する意識】

平成24年12月から25年1月  
小学校5年(木脇小・八代小)  
小学校4年(森永小)

授業ははじめの予習はどうだったか  
(子どもの記述から)

- ・大体こういうことやこんなことをやるといことが分かってやりやすい。
- ・問題が解けた。
- ・考え方が説明できた。

家庭学習として「予習ノート」を活用する予習については、「3 家庭との連携」の項で取り上げる。

## イ 丁寧でわかりやすく教える指導の工夫

「教える」段階において子どもにわかりやすく丁寧に教えることは、後半の「考えさせる」段階を効果的なものにする意味からも重要である。子どもの意欲を高め、効果的に「教える」指導を行うため、パソコン、デジタルテレビ、具体物、掲示資料等を活用した。

### (ア) パソコン、デジタルテレビと具体物の活用

小学校6年 算数科「円の面積」の学習では、パソコンとデジタルテレビを活用して公式を教えた。理解が難しい場面は具体物を使って補足説明した。

機器を活用することで子どもの視線はテレビ画面に集中し、学習意欲も高まった。

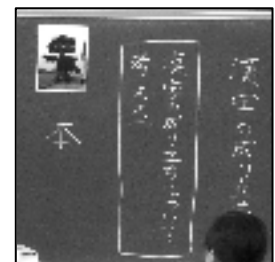
ICT機器の活用は、「理解深化」段階子どもが行う説明活動でも効果的であった。

### (イ) 掲示資料の工夫

間違えやすいところは、掲示資料を提示して教えることも



【6年算数 ICT機器の活用】



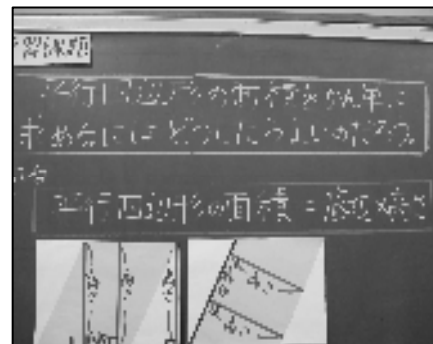
【中1年国語 掲示資料の工夫】

必要である。

中学校1年 国語科「漢字の成り立ち」の学習では、「木」の写真を提示し「象形」の意味と「指事」の意味を説明した。子どもは学習内容を視覚で端的にとらえることができ、「考えさせる」段階につなげることができた。

小学校5年 算数科「9 面積 ②平行四辺形の面積」の学習では、「教える」段階のはじめに、平行四辺形の面積を求める公式を板書した。

子どもは、すでに冒頭予習の中で面積を求める公式があることには気づいていたが、なぜ公式で面積が求められるのかが分かるためには、図形における「底辺」と「高さ」の位置についてしっかり捉えさせることが必要である。そのため、教科書に出てくる図を基にした資料を用い、資料の向きを変えたり回転させたりして誤解しやすい「底辺」や「高さ」を理解させていった。



【5年算数科「面積」での教える段階】

## ウ 対話を通じた指導



【4年算数科 対話をしながら「教える」】

教師は、一方的に学習内容を教えるのではなく、挙手や発言など子どもとの対話を通して、理解状況を把握しながら教えることが大切である。

4年生の「小数÷整数」単元、 $4.92 \div 6$ の筆算の仕方を教える学習では、教師がどこに商を立てるかを子どもに発問したり子どもの声を聞き入れたりしながら教えることで、子どもは納得しながら基本事項を理解することができた。

## (2) 「考えさせる」段階での指導の工夫

### ア 「理解確認」段階

この段階では、定着と理解状況の確認のため、問題を解いたりペアやグループに説明したりさせた。どのような理解確認問題を用意するか、説明活動をどう工夫するかが問題となる。

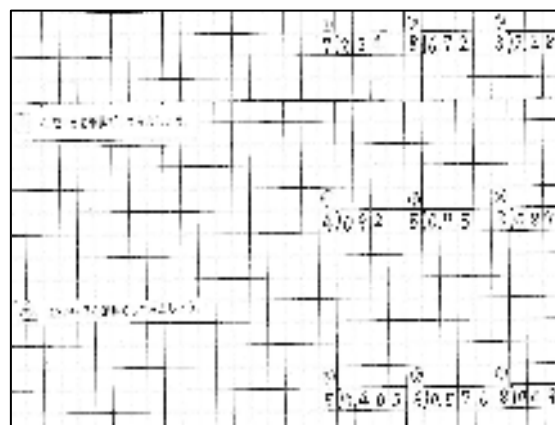
#### (ア) 「理解確認」問題

授業では、教師から教えられたことだけで解くことができる教科書の基本問題や別の練習問題（類題）を用意した。

問題を解いた後、子どもはペアやグループに対し、ノートやプリントを見せながら説明をする。

#### (イ) 説明活動の工夫

話し合いや説明活動を通し、子どもの理解はより確実になる。この場合、自分自身の言葉で説明できることが重要であるが、実態を踏まえていろいろな工夫が必要である。



【理解確認問題例 《小4 算数科》】

### ○ なぞり説明

小学校4年生算数「小数÷整数」では、教師の説明の仕方をなぞる方法で子どもに説明させた。

教師は説明の仕方のモデルとなる。「教える」時には、子どもに分かりやすく、すっきりと説明する必要がある。また、板書のキーワードを明確に示して、説明活動に使わせるようにする工夫も必要である。始めは難しかったが、慣れてくると内容を頭の中で整理し、要点を押さえて話そうとする子どもの姿が見られるようになってきた。教師は、上手く説明できずに戸惑っている子どもをすぐに把握でき、指導もしやすい。

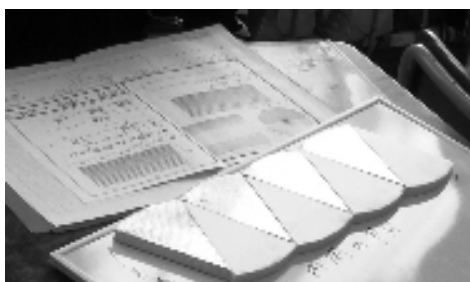
このなぞり説明は、説明に自信がない段階の子どもも安心してできる方法であると言える。



【理解確認段階の「なぞり説明」】

### ○ 具体物の活用

小学校6年算数「円の面積」では、等積変形から公式までの過程を子どもが口頭で他に説明することは難しい。そこで、具体物を活用して面積を求積する方法を説明した。このことは、子どもの理解を助けるだけでなく、教師が理解状況を確認することにも役立った。



【具体物（右）を使った説明 《小6 算数科》】

「教えて考えさせる授業」理解確認段階は、基本的には説明活動を行う場合、ペアや小グループの形態をとる。しかし、学習内容や子どもの実態に応じ、全体で確認する学習形態をとることも考えられる。

## イ 「理解深化」段階

この段階は、よりたくさんの習熟問題に出会わせたり、応用・発展的問題をさせたりして知識・技能を活用する力を伸ばし、問題解決する力を高める段階である。習熟や応用で思考力・表現力・判断力が養われる。問題解決にあたっては、「教えて考えさせる授業」の基本的なスタイルである協同学習の形をとって問題解決に取り組ませることも有効である。

### (ア) 習熟のための問題練習

算数・数学では、基礎的な知識・技能の適用に繰り返し慣れさせることが必要な学習内容の場合がある。このような場合は、教科書の該当ページの問題を完全にこなす・習熟させることが目標となる。個別の指導が中心となるが、なお時間的な余裕が生み出された場合は、子どもの状況に応じ、単元末や巻末等の応用問題にあたることも考える。

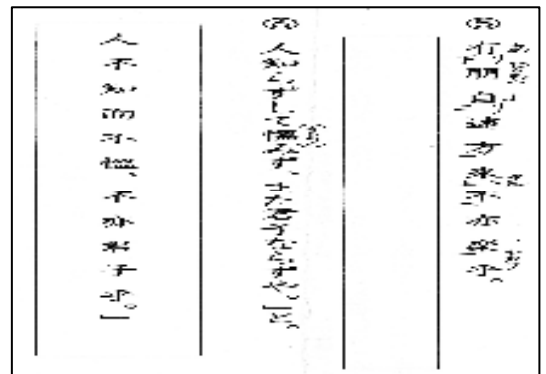
### (イ) 工夫した「理解深化」問題＝応用・発展的問題

- 逆方向の思考を促す問題（中学校3年国語科「論語」の例）

ここでは、逆方向の問題を考えさせることで問題解決する力を高めることができた。

まず、「理解確認」の段階で、返り点の「レ点」や「一・二点」について復習し、さらに、「置き字」や「上・下点」といった新しい学習内容を押さえる。

「理解深化」の段階では、応用・発展問題として、書き下し文を手がかりにして訓読文を作る問題に取り組みさせた。難易度が上がるので、生徒の多くは意欲をもって問題解決に当たった。また、問題が解けた子どもは、つまずいたり苦手意識のある友だちからの質問に答えたりするなど、学び合い教え合う姿も多く見られ、学習のポイントが明確になって、活用する力を伸ばすことができた。



【逆方向の問題 《中3 国語科》】

○ 発見型の問題

図形の面積を求める問題では、公式を使うために必要な条件を見つける力が必要である。そのためには、基本事項の理解と隠された条件への気づきが必要である。



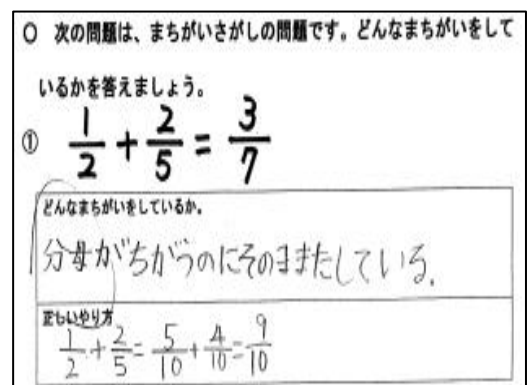
【発見型の問題 《小5 算数科》】

小学校算数科の授業（6年「円の面積」、5年「面積」）では、求積するために必要な長さ（半径、底辺、高さ）を実測させたり、問題に隠されている条件を発見させたりする問題に取り組みさせた。子どもは、プリントを回して眺めてみたりじっと凝視したりしながら問題解決に取り組んだ。

求積問題では、このような発見型の問題が意欲を高め思考力を育てるのに有効であった。

○ 間違い探し問題

学習内容の理解を定着させるために、子どもが誤解・誤答しそうな問題を「間違い探し問題」として取り組みさせた。子どもは理解した学習事項を活用し問題解決に意欲的に取り組んだ。また、なぜ間違っているかを説明させることによって、本時の基礎的な知識・技能の確認と振り返りをすることもできた。



【間違い探し問題 《小5 算数科》】

間違い探し問題の提示は、1問でも子どもたちの取組意欲を高めることができ、思考力や学習意欲を高めるのに効果的であった。

(ウ) 協同的な問題解決

応用・発展的問題は、子どもの理解状況によっては問題解決の糸口を見いだすことが難しい場合がある。そのような場合、グループを組んで問題解決を図らせた。このように、3人以上のグループを組んで課題解決する活動をここでは「協同的問題解決活動」と呼ぶ。



【協同的問題解決活動 《中1年国語科》】

中学校1年生の国語科授業「漢字の成り立ち」では、発展的課題として、語群を会意・形声に分類し、その特徴をとらえるという課題を設定した。



31名の生徒を8グループに分けて活動を行わせたところ、語群のカードを利用しながら、生徒間でディスカッションを進めていくうちに、すべてのグループで問題解決を図ることができた。

このような問題解決の活動を学習指導過程に取り込むことにより、活用する力の育成や理解のより深い定着が図られるだけでなく、思考力・判断力・表現力を高めることができる。

## ウ 自己評価

学習を子ども自身のものとするために「自己評価」の場を設定し、「わかったこと」を振り返り自分の言葉で自己評価カードに書かせるようにした。

### (ア) 学習内容と対応させた自己評価

自己評価は、「楽しかった」「わかった」を◎○△等で評価させるだけでなく、授業で「わかったこと」や自分の疑問等について自分の言葉で記述することが重要である。これは、子どもの「メタ認知」能力<sup>\*4</sup>の育成につながる。また、教師も子どもの理解の定着度を診断したり授業改善の手がかりにしたりできる。

※4 「メタ認知」については様々な定義があるが本研究では、「自分の認知を、客観的に把握し認知すること」としている。

### (イ) 自己評価カードの工夫

自己評価カード（振り返りカード）の形式は、学習目標に対応して振り返ることができるよう、目標と振り返り欄を併せて示すことを基本とした。（例：右図）

これ以外に、単元全体を1枚の用紙に書くことができる工夫や子どもの学習への満足度や充実度を◎○△でも表記させる等の工夫を行った。

Handwritten self-evaluation card with three sections:

- Top section: (十)月(廿)日(金)曜日. ◎学習目標 分数を演算し、最小公倍数や最大公約数をわかった。
- Middle section: ◎理解できたこと、出来たこと。目標だった(分数)がわかったということができました。good!
- Bottom section: ◎分からないこと、できなかったこと。最小公倍数と最大公約数を持って自分の考えたことが(分数)について、わかったか確認しました。



【自己評価カードの工夫】

なお、時間に余裕のある場合には、カード記入後に子どもの感想を公表させることも子どもの充実感を高めるために有意義である。（写真：上）

### (ウ) 子どもの変容

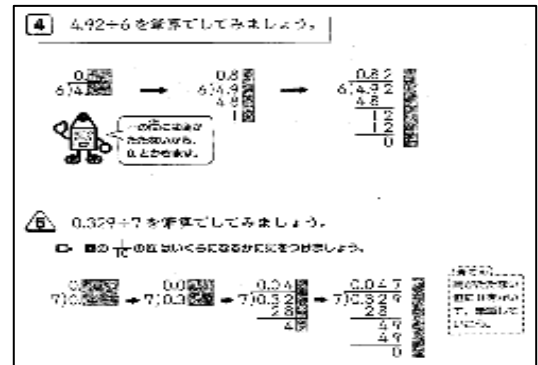
「自己評価」を継続していくと、次のような変容が見られるようになった。

- |        |   |
|--------|---|
| 【意欲面】  | ・「わかった」「楽しかった」の欄の◎の評価が増えてきた。  |
| 【メタ認知】 | ・「分数のわり算の仕方がわかった。かけ算の逆だと思った。」<br>・「通分するときは、最小公倍数を分母にすればいいことがわかった。」<br>・「約分のやり方があまりよくわからなかった。」 |
| 【家庭学習】 | ・「今までの勉強はよくわかった。忘れないように復習していきたい。」   |

子どもによっては、学習内容の理解についてだけでなく、友達の発表の様子や家庭学習のことまで書いてくる子どもがおり、自分の学習の仕方を振り返る機会となっているようである。

### (3) 授業構成や単元構成の在り方

理解深化段階の問題解決は、しばしば時間不足に陥ることがある。しかし、「教える」段階での丁寧、かつ効率的指導や単元構成の工夫によって十分に時間を確保することができる。



【「教える」指導の効率化】

#### ア 「教える」段階における効率的指導

4年生算数「小数÷整数」の筆算の仕方を教える

学習問題は、一の位に0を立てる問題と十分の一の位以下でも商に0が立つことを説明する問題に分かれている。そこで、この二通りの考え方を子どもとの対話を通して一度に集約して「教える」ことで、より多くの問題解決に取り組ませる時間を確保することができた。

#### イ 単元構成の工夫

単元構成を考えると、教師が授業（単元）のねらいを明確にもち、子どもに「教える」「考えさせる」内容を明確にすることが大切である。

6年生「円の面積」の単元では、円の面積の求め方の理解と公式を活用した円の面積の求積をねらいとして、指導計画（全4時間）を考えた。（右の表参照）

	第1時	第2時	第3時	第4時
主な学習内容	円の面積の見積もり	円の面積の公式の理解	適用問題 発展問題	発展問題 Web学習 単元評価 問題

本単元では、「予習」を取り入れた指導により、

【単元構成の工夫《小6算数科》】

「円の見積もり」を1単位時間に集約して適用問題や発展的な問題、Web学習単元評価問題等に多く取り組む時間を確保することができた。

### 3 授業と家庭学習との関連づけ

本町の教育的課題の一つに、望ましい学習の仕方を身に付けさせることが挙げられる。学校と家庭が連携し、家庭学習の機会として主体的に予習に取り組ませることは、確かな学力を身に付けさせる上で極めて大切である。

本研究センターでは、予習の意義を次の二点でとらえ、家庭学習（予習）指導の在り方について研究を進めた。

#### 「予習」の意義

- 1 「予習」は、授業の前に学習内容にふれさせる先行学習である。これによって授業理解を高めたり、授業参加への意欲を育てたりするなど学習の構えを育てる。
- 2 「予習」は、自ら学習方法を選択し自分なりの学ぶ方法を身に付けていくという主体的な学習態度の形成につながるものである。

#### (1) 「予習ノート」を活用した家庭学習《平成24年12月～平成25年1月実施》

授業との関連を図り、子どもが予習の必要性を感じ取り、主体的な家庭学習を行うための手立

てとして「予習ノート」(右)を作成し、その指導と活用の在り方について検証した。

「予習ノート」の事前指導は、次のように行った。

- 予習のし方は、自分にあったやり方でやります。
  - 教科書を使ってやります。
- 3つの仕方のどれにするか、○をつけておきます。**

**予習したことを書き込むところです**

- ・一言感想でもいいです。
  - ・教科書の問題をために1つやってみましょう。
- ※ 途中で分からなくなっても、消さずに残しておくことも大事です。

明日はこんな勉強をします。(学習目標)

**授業のふりかえりをします。**

- ・何ができるようになりましたか？
- ・難しかったところはどんなことですか？
- ・その他の感想など何でも書きましょう。

【「予習ノート」の事前指導】

## ア 「予習ノート」に至るまで

本研究センターの「予習ノート」は、次のような段階的な指導を経て子どもに行わせた。

- 1 冒頭予習を実施し、予習の意義を理解させ、その仕方に慣れさせる。また、授業に役立つことを実感させる。
- 2 「予習ノート」を使い、家庭で取り組む。

この場合、子どもに難しくないよう次のような予習の内容を設定した。

- a 教科書に目を通す
- b わからない所に印や付箋をつける
- c 教科書の問題にチャレンジする

家庭には、予習の様子を見守ってもらうよう事前に文書で依頼した。

## イ 「予習ノート」を使った予習の実施と家庭との連携

「予習ノート」の取組を、小学校算数では12月から1月初めの単元、中学校国語では単元「話題をとらえて話し合おう-バズセッションをする」(1年)で実施した。

はじめは、やや戸惑いがちな子どもも見られたが、慣れるとともに取組や内容の充実が見られるようになってきた。また、三つの内容すべてに取り組む子どもも見られるようになってきた。

中学校では最低音読はしてくるようにとの指示を出したが、ほとんどの子どもが要点をまとめたり、分かったことや疑問点を書いてきたりしていた。

「予習ノート」をすべての授業で実施したのではないが、今後継続して使えるよう研究を進めていく。

【「予習ノート」(中学校国語)】

## (2) 予習に対する意識

予習に対する教師の意識と子どもの予習に対する意識調査を実施した。（町内全小中学校教師、4つの小学校4・5・6年児童）

### ア 教師の意識

小・中学校ともに教師はあまり出さないといえる。（図4）その理由としては、「予習より復習が大事」「学習の新鮮さが大事」とする意見が多く出された。（図5）

そこからは、授業を重視する教師の姿勢とともに、子どもがした予習の見届け指導の難しさが伺える。

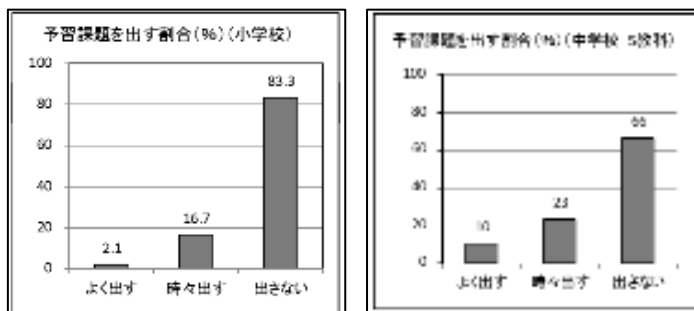


図4【教師が予習を出す割合 [H24.9月]】

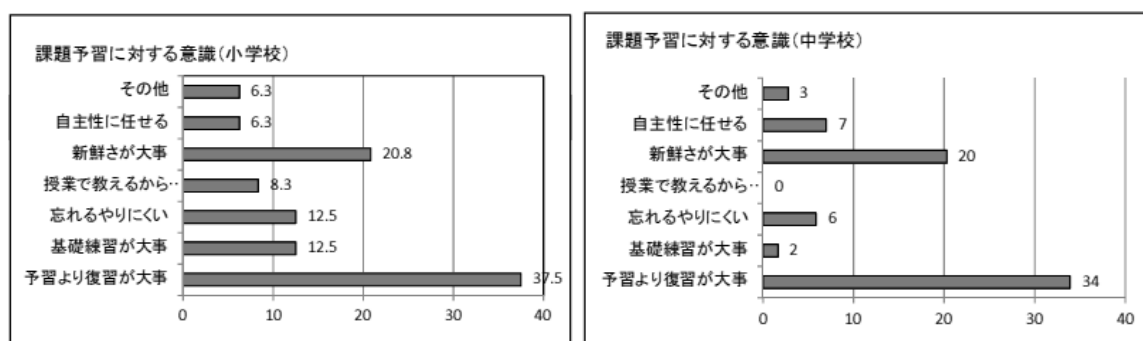


図5【予習に対する教師の意識（町内小中学校）】

### イ 子どもの意識（小学校4、5年、中学校2年）

家庭での「予習ノート」の効果について、連続して調査を行った。

学校によりやや差があるが、下のグラフのように小中学校とも多くの子どもが肯定的に捉えている。

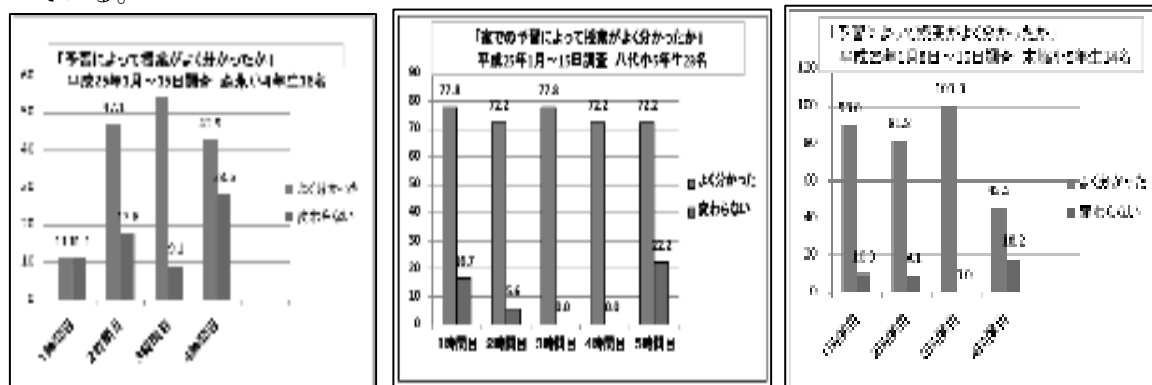
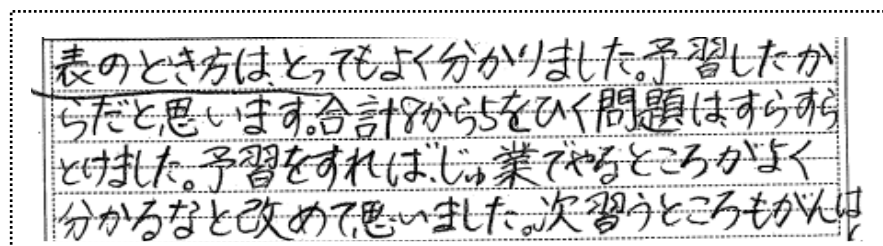
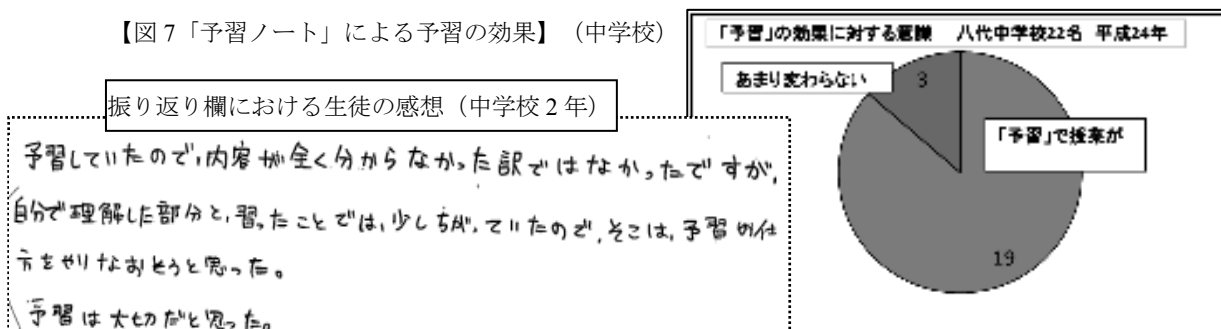


図6【「予習ノート」による予習の効果（小学校3校）】



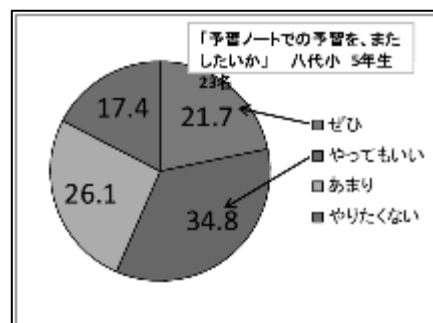
【振り返り欄における児童の感想の一部】  
（小学校4年）

【図7「予習ノート」による予習の効果】（中学校）



「予習の継続」については、「今後もぜひ」と「やってもいい」が2つの小学校で60%以上であった。しかし、やりたくないと答える子どももおり、これが何によるものかは、今後検証が必要である。

【図8「予習ノートでの予習をまた、やりたいか（小学校5年）】



## ウ 保護者の意識

子どもが「予習ノート」でする予習について身届けをお願いした保護者からは、次のような感想を得た。（5年生保護者から抜粋）

- ・これからどんどん難しくなるので、予習をすることはとても大事である。はじめはよくわからなかったとしても授業で初めてそのページをみるよりはよく頭に入ると思う。これからも自分から予習をする習慣を身につけさせたい。
- ・進んで取り組むことができたのがよかった。親も今、どんな授業をしているのか、どこが分からないのか一緒に考えながらできた。
- ・ずいぶん昔のことだが、私たちのころは、「次のところを予習してきてください」と先生がよく言われていたので、予習というのをやっていたように思う。
- ・予習では自分で本を読み、考える。授業も、受け身の姿勢でなく自分の力で答えを出そうとするのではないかと思う。

「予習」は、将来に役立つ主体的な学習態度の育成という点で非常に大切なことであるが、子どもが継続的に予習をする態度を育てるには、下記の点に留意することが必要である。

- ・予習のねらいを明確にする。  
（授業への構えをつける、先行学習の1つ）
- ・段階的な指導が必要である。<sup>※6</sup>  
（事前に冒頭予習で指導しておく等、予習の仕方を具体的に指導しておく）
- ・子ども自身が効果を実感できることを大切にする。  
（子どもがしてきた予習に目を通す、授業の中で取り上げたり助言をしたりして認める）
- ・家庭（保護者）と予習のねらいや予習の仕方について十分な共通理解をしておく。  
（予習内容・予習の時間への過度な期待を避ける）

※6 子どもが予習に抵抗なく取り組む仕方について市川東大教授は次のように述べる。

「授業で進むページ数というのは、2ページ～4ページぐらいでしょう。その部分を5分でも10分でもよいからざっと読む。これだけで非常に効果があります。もう少しできるようなら、わからない所に付箋をつけさせるのもひとつの方法です。そして、子どもに、わからない部分は先生の話をしっかり聞こうという気持ちを持たせて授業に臨ませると、理解がぐんと深まります。」

<http://www.889100.com./midori/category/advice/000021.php>

## VIII 成果と課題 〈○成果 ●課題〉

### 1 「教えて考えさせる授業」について

- 「教える」こと「考えさせる」ことが明確で、授業構成がし易い。
- 「教える」段階で「教える」ことの集約により、「考えさせる」段階における時間的余裕が生じ協同的学習活動を含めた多様な「理解深化」活動を組み込むことができた。
- 授業冒頭の予習は手軽にでき、授業への構えをもたせるのに有効であった。
- 「ねらい」に対応した「自己評価」の工夫により子ども自身が自分の学習を振り返る姿勢が徐々に育ってきた。
- 「教える」段階における指導方法を工夫し、実感を伴った丁寧な教えとなるようにすることが必要である。
- 「理解確認」と「理解深化」の課題と活動内容については、内容と指導のねらいに応じてバリエーションを考えていく必要がある。
- 習熟度別指導（少人数指導）に分かれる場合、子どもの実態や指導内容について教師間の連携を密にする必要がある。

### 2 「予習」を中心とした家庭学習との連携について

- ねらいを焦点化し、取り組みやすい「予習」指導によって、授業理解度が高まるとともに、子ども自身が「予習」の効果を実感できた。
- 家庭と連携を図ることで、「予習」への取り組み意欲を高めることができた。
- 「予習」の継続には、そのねらいと方法について家庭と十分共通理解しておく必要がある。
- 「予習」の継続とその効果について、確かなデータを収集することが必要である。

#### 《参考図書》

- ・ 文部科学省 小学校学習指導要領解説総則
- ・ ベネッセ教育研究開発センター「授業と家庭学習のリンクが子どもの学力を伸ばす」  
(学力向上のための基本調査 2008 インターネット版)
- ・ 市川伸一 『「教えて考えさせる授業」を創る』 図書文化 2008
- 同 『教えて考えさせる授業 小学校』『教えて考えさせる授業 中学校』図書文化 2009